

東日本大震災後の幼児の発達に関する保育者の意識調査

－福島県内の保育者を対象とした質問紙調査から－

Survey of Childcare Attitudes Regarding Infant Development

after the Great East Japan Earthquake

Based on a Questionnaire Survey for Childcare Workers in Fukushima Prefecture

柴田 卓* 伊藤 哲章* 仲西真美子* 三瓶 令子*

Suguru Shibata

Tetsuaki Itou

Mamiko Nakanishi

Reiko Sanpei

In this research survey, a questionnaire survey was conducted to clarify the Childcare Workers' perceptions of the current infant development and their regional differences in Fukushima Prefecture. The target of the questionnaire is childcare workers who experienced the Great East Japan Earthquake and the Fukushima Daiichi nuclear accident. The following points were clarified mainly from the results of this survey.

First, 52% of the daycare workers who responded to this survey answered that they did not think that the children were fully developed. Secondly, 94% of the daycare workers deliberately promoted physical activity, and 62% answered that they had enough time for physical play. However, the percentage of childcare workers who answered that the physical activity time per day was "less than 1 hour" was 38% for 3-year-old children, 30% for 4-year-old children, and 24% for 5-year-old children. There was significantly less activity time done by Nakadori childcare workers. Third, 31% of childcare workers answered that they do not think that their infant's mental state is well developed. 41% of childcare workers answered that they couldn't suppress their emotions when needed. Fourth, regarding the regional differences in this survey, many results were confirmed showing significant differences between the Aizu district and Nakadori.

1. はじめに

東日本大震災および福島第一原発事故から8年が経過した。除染が進む中で、かつての保育・幼児教育を取り戻しつつある地域もあれば、未だ放射能の脅威にさらされている地域も存在している。震災当時は、放射能による影響から食品に対する制限、屋外活動時間の制限、自然物や動植物に触れることへの制限、生活環境の変化、放射能に対する保護者の不安とその認識の相違など、様々なモノ・コトに対する制限と変化を余儀なくされた。それまでに培ってきた豊かな保育の営みは途絶え、子ども達の健全な心身の発達に計り知れない影響を与えた。草

* 幼児教育学科

野、藤田(2017)は、2011年4月から2015年3月までに発表された健康問題に対する論文の検討⁽¹⁾で、被災した子どもたちの精神的健康問題として、ストレス反応、行動変化、心身疲労、高揚感、学校生活への不適応が抽出されたことを報告している。身体的健康面に関しては、2017年の学校保健統計調査⁽²⁾において、6つの年齢で肥満傾向児の割合が全国最多となった。現在もなお、子どものストレス症状や肥満傾向児の解消が福島県の課題⁽³⁾としてあげられている。

こうした現状を踏まえ、本研究は東日本大震災および福島第一原発事故を経験した福島県の保育者に焦点を当て、現在の幼児の発達に対してどのような認識を持っているのかについて、質問紙調査から明らかにすることを目的とした。

2. 調査の手続き

2-1 調査地域と対象

本調査では、福島県内にある幼稚園、認定こども園、保育園、保育所の計619施設を対象とした。また、震災前後に関連した質問を設定したことから、回答者を概ね震災を経験している保育歴10年以上に限定した。比較の対象は、福島県全体、いわき市や南相馬市をはじめとする県の東側地域を指す浜通り、福島市や郡山市をはじめとする県の中央を指す中通り、会津若松市や喜多方市をはじめとする県の西側地域を指す会津地方の4つとした。特に会津地方は、震災から1年後の2012年2月時点で全17市町村の小中学校が屋外活動を制限していない⁽⁴⁾ことから、放射線量に関して福島第一原発事故の影響を比較的受けていない地域といえる。

2-2 調査方法

対象とした全施設に対し、郵送により研究概要、調査票、研究調査承諾書を配布し、郵送により調査票、研究調査承諾書の回収を行った。調査時期は2019年5月～2019年6月である。

2-3 調査票の回収状況

本調査で回収した調査票は333件であり、有効回答数は310件、回収率は50%である。内訳は、浜通りの認定こども園7件、保育所および保育園28件、幼稚園19件、計54件、中通りの認定こども園34件、保育所および保育園102件、幼稚園71件、計207件、会津地方の認定こども園15件、保育所および保育園27件、幼稚園7件、計49件である。

2-4 調査内容

本調査における質問数は35項目である。その内、本稿に関連する内容は資料1に示す15項目である。主に身体面に関する内容と精神面に関する内容である。質問項目は先行研究⁽⁵⁾を参考に筆者らが独自に設定した。

3. 結果と考察

設問1から設問9は身体面の発達に関する項目であり、設問10から設問15は精神面の発達に関する項目である。回答結果は「とてもそう思う」と「そう思う」を「そう思う」、「全くそう思わない」と「そう思わない」を「そう思わない」にまとめた上で地域別に集計を行った。各設問については、県内の3地域において統計的な有意差がみられるか、カイ二乗検定を実施した。有意差が認められたのは、設問1、設問2、設問4、設問5、設問6、設問7、設問8、設問10、設問12、設問13、設問14、設問15の12項目である。なお、統計分析ソフトはjs-STAR⁽⁶⁾を用いた。また、残差分析の結果は、有意に多いは▲、有意に少ないは▽で表示した($p<.05$)。

3-1 身体面の発達に関する回答結果

はじめに、身体面の発達に関する回答結果である。2019年6月時点(以下：現在)の「現在の幼児の運動能力は、十分に発達(安定)している」に関する設問1では、「そう思う」と回答したのは、福島県全体(以下：県全体)は28%、浜通りは35%、中通りは24%であり、会津地方は39%と最も高い値を示した。一方、「そう思わない」と回答したのは、県全体と浜通りが同数の52%、中通りは59%であるのに対し会津地方は18%と非常に低い値を示した。「震災前と変わらない」と回答したのは県全体で20%、浜通りは13%、中通りは17%、会津地方は43%と県全体の2倍以上の値を示した。この設問に関しては、県全体の数値からも半数以上の保育者が現在の幼児の運動能力が十分に発達しているとは思わないという認識を持っていることが明らかとなった。その要因には、身体活動時間や外遊び時間⁽⁷⁾が関与していると推測される。

「現在の幼児の身体は、十分に発達(安定)している」に関する設問2では、「そう思う」と回答したのは、県全体で34%、浜通りは43%、中通りは32%、会津地方は37%であった。一方、「そう思わない」と回答したのは、県全体で38%、浜通りは44%、中通りは41%であるのに対し、会津地方は17%と最も低い値を示した。県全体で4割近い38%の保育者が現在の幼児の身体が十分に発達しているとは思わないという認識を持っていることが明らかとなった。また、会津地方においては46%の保育者が震災前と変わらないと回答していることから、身体能力と身体の発達に関しては半数近くの保育者が震災による影響を感じていないことが明らかとなった。

「意図的に幼児の身体活動を促す取り組みを行っている」に関する設問3では、有意差は見られず、「そう思う」と回答したのは県全体、中通り、会津地方で同数の94%、浜通りで96%であった。この回答結果から、身体活動を促すことへの意識は一様に高いことが明らかとなった。

「幼児の運動遊び時間は、十分に確保できている」に関する設問4では、「そう思う」と回答したのは、県全体と中通りが同数の62%、会津地方は53%、浜通りは69%と最も高い値を示し

東日本大震災後の幼児の発達に関する保育者の意識調査

た。「そう思わない」と回答したのは、県全体で14%、浜通りは13%、中通りは16%、会津地方は4%と最も低い値を示した。身体活動を促す取り組みや運動遊び時間に関するこれらの回答結果から、身体能力や身体の発達に対する保育者の問題意識が高く、そのことに対する取り組みを積極的に実施しているという認識があることが明らかになった。

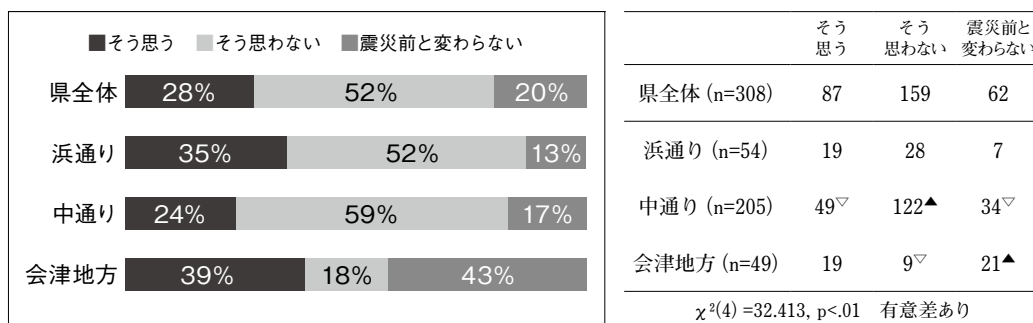


図1. 現在の幼児の運動能力は、十分に発達(安定)している

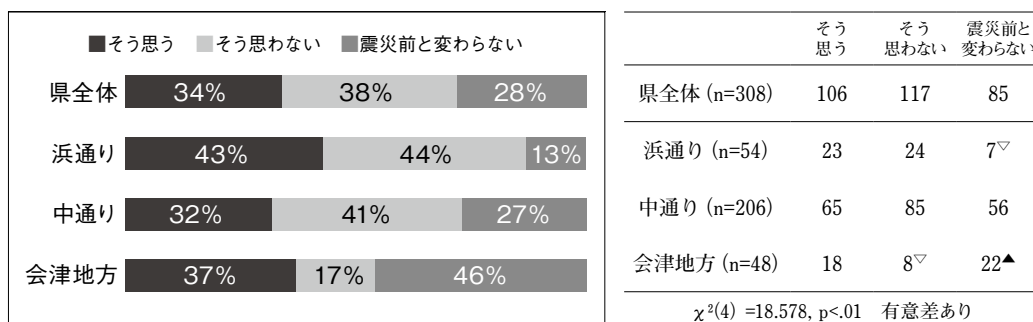


図2. 現在の幼児の身体は、十分に発達(安定)している

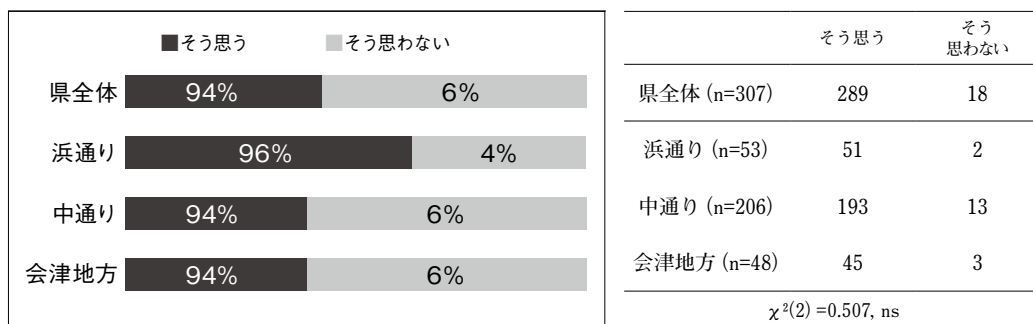


図3. 意図的に幼児の身体活動を促す取り組みを行っている

東日本大震災後の幼児の発達に関する保育者の意識調査

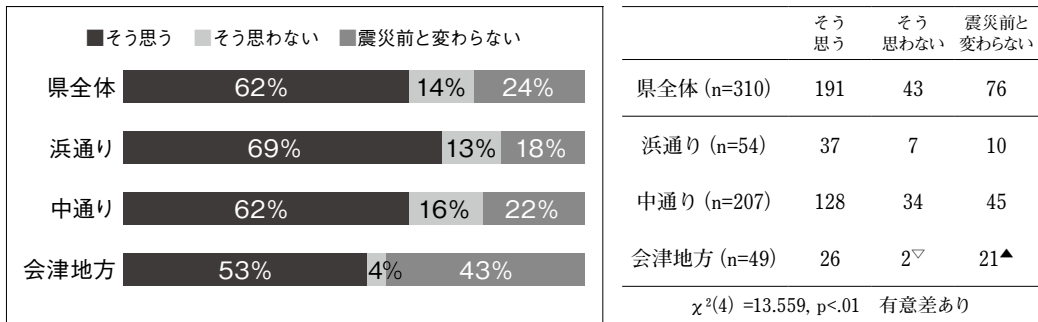


図4. 現在の幼児の運動遊び時間は、十分に確保できている

3-2 身体活動の平均時間に関する回答結果

次に、1日の身体活動の平均時間に関する回答結果である。「現在の3歳児における1日の身体活動の平均時間」に関する設問5では、「1時間未満」と回答したのは、県全体で38%、浜通りは27%、中通りは45%、会津地方は21%と最も低い値を示した。「1～2時間」と回答したのは、県全体で45%、浜通りは57%と最も高く、中通りは40%、会津地方は51%であった。「2時間以上」と合わせると県全体が62%、会津地方は79%と最も高く、中通りは55%と非常に低い値を示した。

「現在の4歳児における1日の身体活動の平均時間」に関する設問6では、「1時間未満」と回答したのは県全体で30%、浜通りが21%、中通りが37%と最も高く、会津地方は13%と非常に低い値を示した。「1～2時間」と回答したのは県全体で48%、浜通りは60%と最も高く、中通りは43%、会津地方は55%であった。「2時間以上」と合わせると県全体が70%、会津地方は87%と最も高く、中通りは63%と低い値を示した。

「現在の5歳児における1日の身体活動の平均時間」に関する設問7では、「1時間未満」と回答したのは県全体で24%、浜通りは17%、中通りは30%と最も高く、会津地方は6%と非常に低い値を示した。「1～2時間」と回答したのは県全体で53%であり、浜通りは63%と最も高く、中通りは48%、会津地方は60%であった。「2時間以上」と合わせると県全体が76%、会津地方が94%と最も高く、中通りは70%と低い値を示した。身体活動の平均時間に関しては、3つの年齢で概ね同様の傾向が見られ、とりわけ中通りの身体活動時間が他の地域と比較して短いことが明らかとなった。この点に関しては、対象地域における施設の種別も関連している可能性がある。会津地方においては認定こども園への移行が進み、在園時間の短い幼稚園数の割合が少ないことも考慮しなければならない。

東日本大震災後の幼児の発達に関する保育者の意識調査

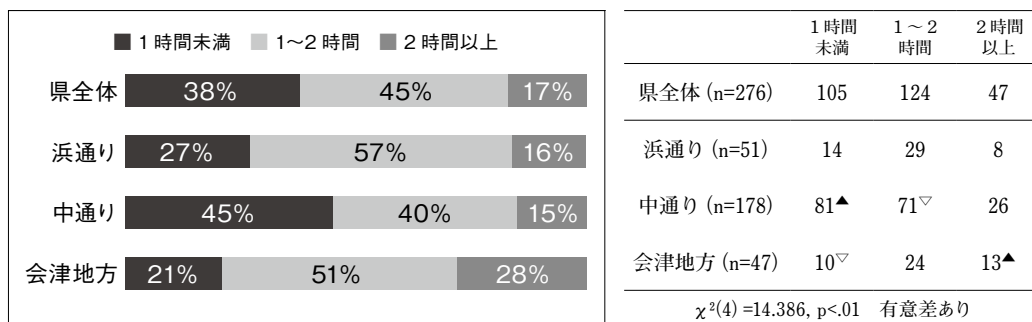


図5. 現在, 3歳児の1日の身体活動(運動)の平均時間

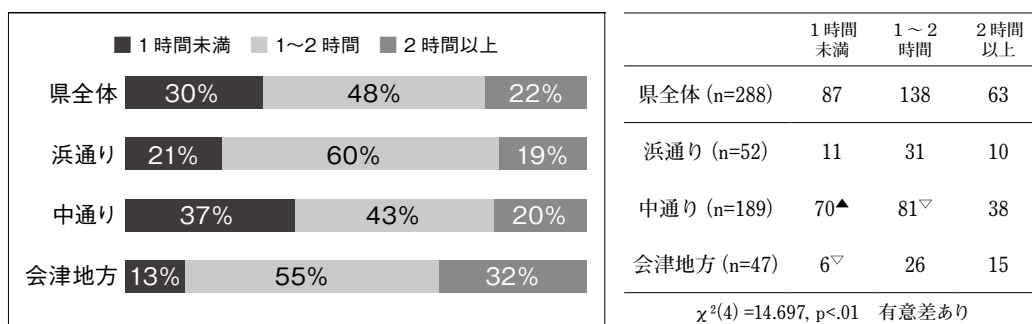


図6. 現在, 4歳児の1日の身体活動(運動)の平均時間

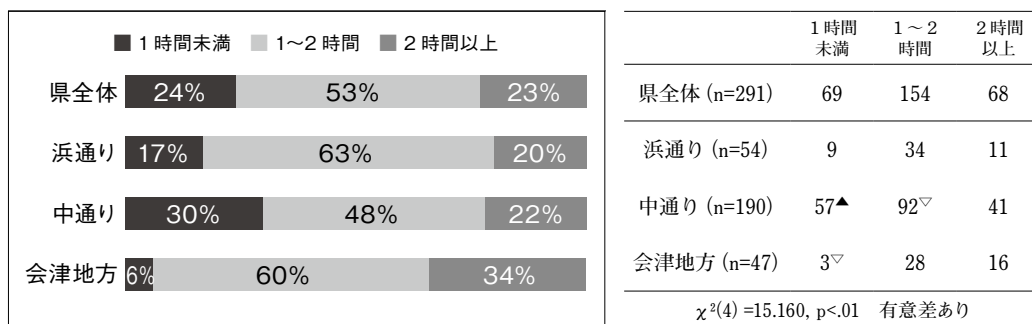


図7. 現在, 5歳児の1日の身体活動(運動)の平均時間

3-3 怪我・転倒に関する回答結果

次に、怪我・転倒に関する回答結果である。「現在の幼児は予想外の部位に怪我をすることが多い」に関する設問8では、「そう思う」と回答したのは、県全体で36%、浜通りは33%、中通りは40%と最も高い値を示し、会津地方は22%と低い値を示した。「そう思わない」と回答したのは、県全体で27%、浜通りは37%、中通りは24%、会津地方は県全体と同様で27%であった。

東日本大震災後の幼児の発達に関する保育者の意識調査

「現在の幼児は顔から転ぶことが多い」に関する設問9では、有意差は認められなかったが、「そう思う」と回答したのは、県全体で36%、浜通りが35%、中通りが38%と最も高く、会津地方は27%と最も低い値を示した。怪我・転倒に関する回答結果からは顕著な差は見られないものの、県全体と比較すると、設問8と9において「そう思う」と回答した保育者の割合は、他の地域と比較して中通りが高く、会津地方は低い値を示した。また、会津地方においては、設問8で51%、設問9で49%の保育者が震災前と変わらないと回答していることから、怪我・転倒に関して概ね半数の保育者が震災による影響を実感していないことが明らかとなった。

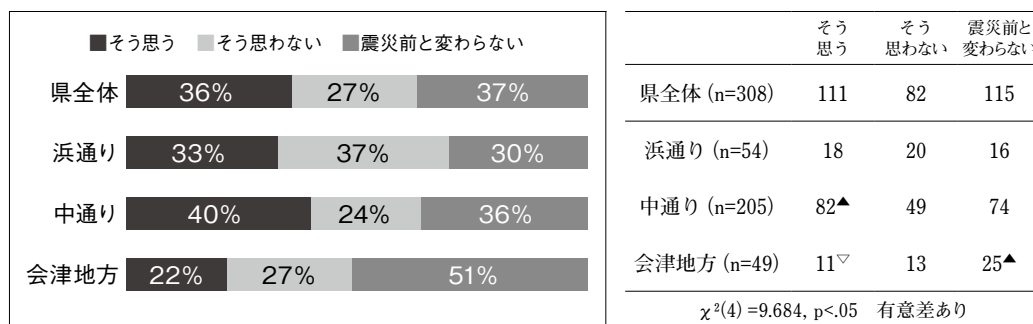


図8. 現在の幼児は予想外の部位に怪我をすることが多い

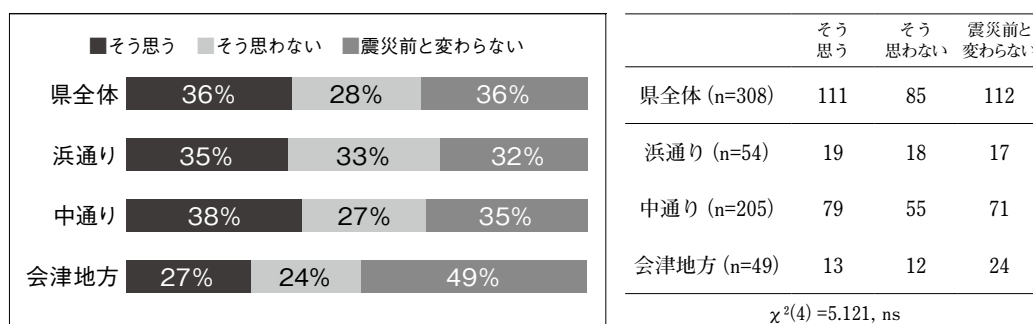


図9. 現在の幼児は顔から転ぶことが多い

3-4 精神面の発達に関する回答結果

次に、精神面の発達に関する回答結果である。「現在の幼児の心理・精神状態は、十分に発達(安定)している」に関する設問10では、「そう思う」と回答したのは、県全体が41%、浜通りは55%と最も高く、中通りは38%、会津地方は37%であった。一方、「そう思わない」と回答したのは、県全体で31%であり、浜通りは28%、中通りは36%と最も高く、会津地方は12%と非常に低い値を示した。浜通りは、「震災前と変わらない」が17%と他の地方と比較して最も低い値を示し、「そう思う」が非常に高い値を示したことから、震災当時と比較して現在の

東日本大震災後の幼児の発達に関する保育者の意識調査

幼児の精神面が安定してきたという認識を持っている保育者が半数以上であることが明らかとなった。

「現在の幼児は必要な時に感情を抑えられない」に関する設問11では、有意差は認められなかった。「そう思う」と回答したのは、県全体が41%であり、浜通りは45%と最も高く、中通りは42%、会津地方は33%と低い値を示した。一方、「そう思わない」と回答したのは、県全体が26%であり、浜通りが34%と最も高く、中通りは25%、会津地方は24%であった。県全体で約4割の保育者が、現在の幼児は必要な時に感情を抑えられないという認識を持っていることが明らかとなった。

「現在の幼児は暴力的(たたく・かみつくなど)になることが多い」に関する設問12では、「そう思う」と回答したのは、県全体が22%であり、浜通りは15%と低く、中通りは25%、会津地方は18%とやや低い値を示した。「そう思わない」と回答したのは、県全体が37%であり、浜通りは57%と高く、中通りは33%とやや低く、会津地方は29%と低い値を示した。設問11と設問12では、他の地方と比較して浜通りの保育者が「感情を抑えられない、暴力的になることが多い」とは思わないという実感を持っていることが明らかになり、精神面での安定を裏付ける結果となった。

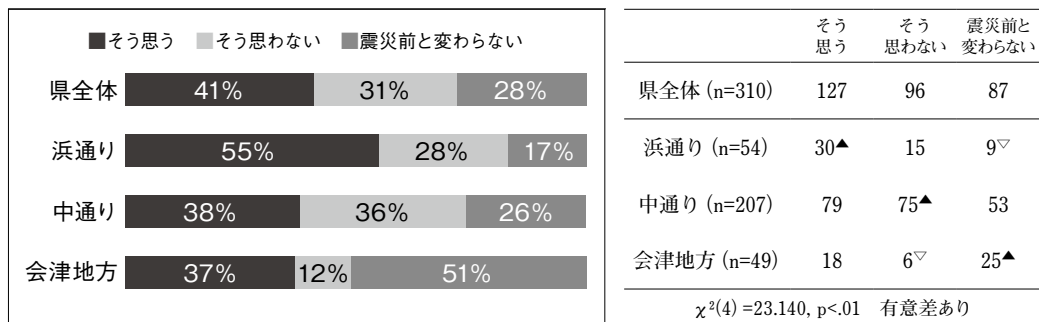


図10. 現在の幼児の心理・精神状態は、十分に発達(安定)している

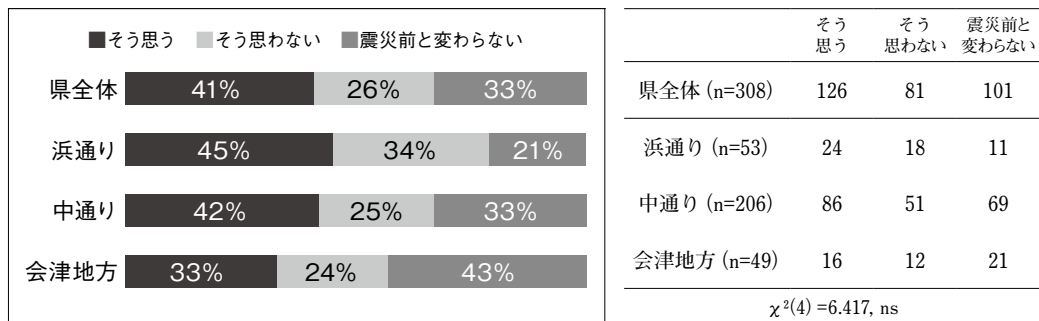


図11. 現在の幼児は必要な時に感情を抑えられない

東日本大震災後の幼児の発達に関する保育者の意識調査

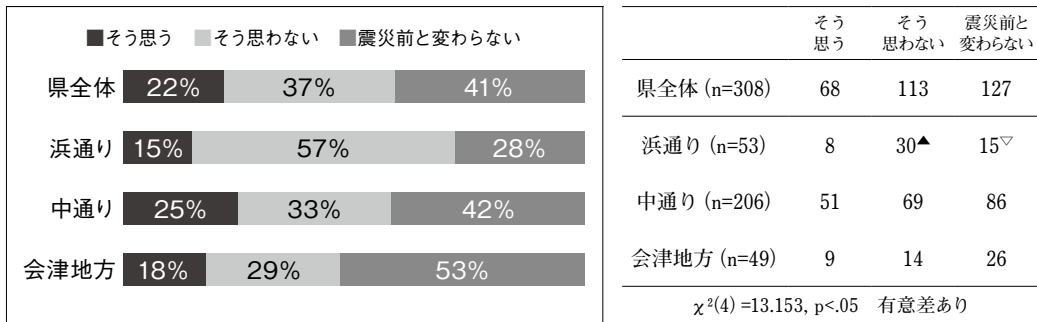


図12. 現在の幼児は暴力的(たたく・かみつくなど)になることが多い

「現在の幼児は怖がりで、挑戦しようとしない」に関する設問13では、「そう思う」と回答したのは、県全体で21%、浜通りは30%、中通りは21%、会津地方は10%と最も低い値を示した。一方、「そう思わない」と回答したのは、県全体で43%、浜通りと会津地方が47%とやや高く、中通りは41%であった。

「現在の幼児は協力・協働して遊ぶことが多い」に関する設問14では、「そう思う」と回答したのは、県全体で16%であり、浜通りが20%、中通りが13%と最も低く、会津地方は27%と高い値を示した。一方、「そう思わない」と回答したのは、県全体で33%であり、浜通りと中通りが同数で35%であるのに対し、会津地方は18%と最も低い値を示した。

「現在の幼児は粘り強く、最後までやりとげようとする」に関する設問15は、「そうと思う」と回答したのは、県全体で13%であり、中通りは10%と最も低く、会津地方は19%であった。一方、「そう思わない」と回答したのは、県全体で37%であり、浜通りが39%、中通りが41%と高く、会津地方は19%と最も低い値を示した。

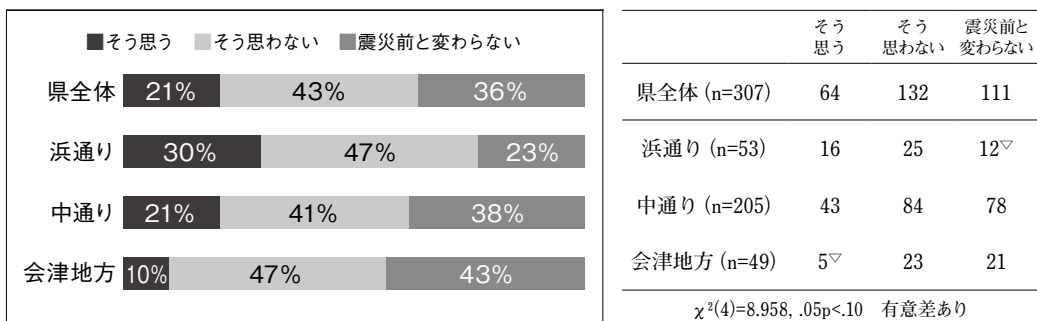


図13. 現在の幼児は怖がりで、挑戦しようとしない

東日本大震災後の幼児の発達に関する保育者の意識調査

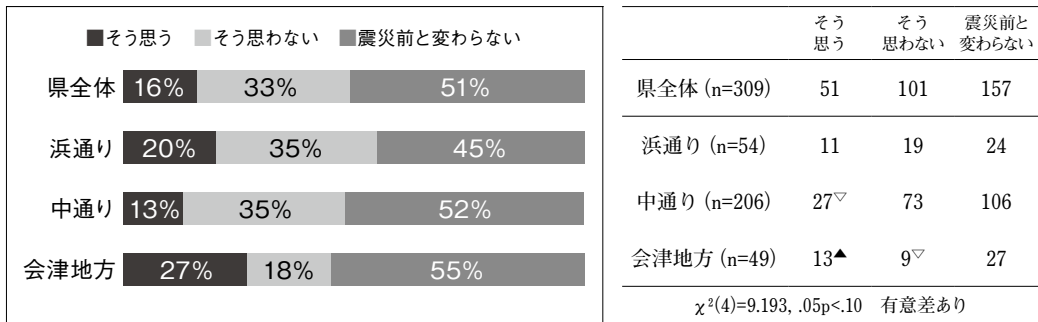


図14. 現在の幼児は協力・協働して遊ぶことが多い

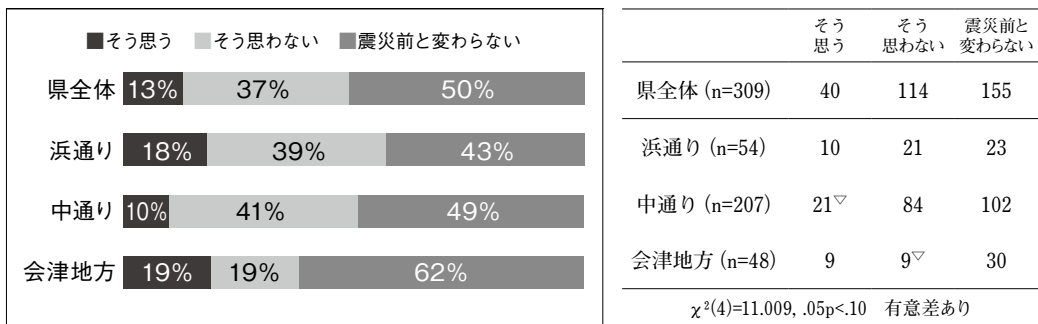


図15. 現在の幼児は粘り強く、最後までやりとげようとする

4. おわりに

本調査は、福島県における現在の幼児の発達に対する保育者の認識とその地域差を明らかにするため、東日本大震災および福島第一原発事故を経験した保育者を対象に質問紙調査を実施した。本調査結果から主に次の点が明らかになった。

第1に、運動能力に関しては52%、身体に関しては38%の保育者が十分に発達しているとは思わないと回答した。第2に、本調査に回答した保育者の内、94%が意図的に身体活動を促す取り組みを実施し、62%の保育者が運動遊びの時間を十分に確保していると回答した。しかし、身体活動時間に関して「1時間未満」と回答した保育者は、3歳児が38%、4歳児が30%、5歳児が24%であり、地域としては中通りが有意に多いことがわかった。第3に、31%の保育者が「現在の幼児の心理・精神状態が十分に発達(安定)しているとは思わない」と回答し、41%の保育者が「現在の幼児は必要なときに感情を抑えられない」と回答した。第4に、本調査における地域差に関しては、屋外活動が制限されていない会津地方とその他の地方、特に中通りとの間に有意差の生じる項目が多数確認された。

また、各設問において震災前と変わらないと回答した保育者の割合は会津地方で概ね4割以上であることがわかった。この点については、震災以前に同様の調査がなされているわけでは

ないため、これらの地域差が震災によるものであることを断定できないことが本調査の限界である。その上で、福島県の動向を正確に捉えるためには次の2点を今後の課題として提示したい。1つ目は、福島県内の全域を対象とした本研究を基礎的調査と位置づけ、震災の影響を全く受けていない他県の保育者に対する同様の調査を実施し、比較検討することが必須である。2つ目は、調査の精度を上げるために対象施設の種別を考慮した分析を実施することである。特に、外遊びや身体活動などの時間を調査する場合、在園時間が異なる園の種別(幼稚園、保育園、認定こども園)を整理した分析が必須である。これらの点を踏まえた調査を継続して情報を発信していくことで、福島県の保育者が子どもの発達に対する意識や保育内容を見直す機会となり、福島県の抱える課題解決の一助となることを期待したい。

[引用文献]

- (1) 草野つぎ, 藤田京子 (2017) 「東日本大震災の広域・複合災害による福島県民の健康問題に関する文献検討—2011年4月～2015年3月までに発表された論文に焦点を当てて—」, 日本地域看護学会誌/20巻3号.
- (2) 福島民友新聞みんなゆうNet, 「福島県の子ども...『肥満』深刻 男女6年齢で全国ワースト1位」
<https://www.minyu-net.com/kenkou/cyoujyu/FM20171223-230428.php>, (最終確認: 2019年9月16日).
- (3) 福島県公式ホームページ, ふくしま新生子ども夢プラン,
<https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/21055a/shinseyumepuran.html>, (最終確認: 2019年9月16日).
- (4) 遠藤明子 (2015) 「原発被災地における子どもの屋外活動制限・自粛の現状」, 福島大学経済学会, 商学論集 83(4), 221-231.
- (5) 本調査項目を作成する際、以下の文献を参考にした。
音山若穂, 関口はつ江 (2019) 「東日本大震災後の福島県浜通りと中通りににおける保育状況の比較」, 群馬大学教育学部紀要, 人文・社会科学編, 68, 201-210.
関口はつ江, 編著 (2017) 『東日本大震災・放射能災害下の保育』, 189-191, ミネルヴァ書房.
- (6) 中野博幸, 田中敏, 著 (2012) 『フリーソフトjs-STARで かんたん統計データ分析』, 技術評論社.
- (7) 本質問紙調査の外遊びおよび自然保育に関連する項目は以下の論文を参照されたい。
柴田卓 (2019) 「福島県における外遊びと自然保育の現状—保育者を対象とした質問紙調査から—」, 自然保育学研究, 第2集, 38-44.

[参考文献]

- (1) 金谷京子 (2012) 「東日本大震災後の保育の場における子どもの変化: 関東地区の保育者への実態調査から」, 聖学院大学論叢, 第25巻, 第1号.
- (2) 増田まゆみ, 大澤力, 他7名 (2013) 「東日本大震災をいかに乗り越えるか: 福島県における子どもの実態と保育の研究I」, 東京家政大学生生活科学研究研究所研究報告36.

東日本大震災後の幼児の発達に関する保育者の意識調査

- (3) 大澤力, 増田まゆみ, 他6名(2015)「東日本大震災をいかに乗り越えるか:福島県における子どもの実態と保育の研究Ⅲ(温故知新プロジェクト)」, 東京家政大学生生活科学研究報告 38.
- (4) 吉村真理子, 大野雄子(2012)「震災による幼児のストレス反応(I)」, 千葉敬愛短期大学紀要 第34号.
- (5) 佐野法子, 糟谷知香江(2013)「被災した乳幼児の行動の変化—福島県いわき市における保育士・幼稚園教諭への調査から—」, 応用障害心理学研究, 第12号.
- (6) 田口久美子(2017)「東日本大震災後の子どもの発達について—幼児期から学齢期に着目して—」, 心理科学/38巻1号.

資料1. 質問項目

1. 現在の幼児の運動能力は,十分に発達(安定)している
 2. 現在の幼児の身体は,十分に発達(安定)している
 3. 現在,あなたの勤める園では,意図的に幼児の身体活動を促す取り組みを行っている
 4. 現在の幼児の運動遊び時間は,十分に確保できている
 5. 現在,3歳児の1日の身体活動(運動)の平均時間は,おおよそどれくらいですか?
 6. 現在,4歳児の1日の身体活動(運動)の平均時間は,おおよそどれくらいですか?
 7. 現在,5歳児の1日の身体活動(運動)の平均時間は,おおよそどれくらいですか?
 8. 現在の幼児は予想外の部位に怪我をすることが多い
 9. 現在の幼児は顔から転ぶことが多い
 10. 現在の幼児の心理・精神状態は,十分に発達(安定)している
 11. 現在の幼児は必要な時に感情を抑えられない
 12. 現在の幼児は暴力的(たたく・かみつくなど)になることが多い
 13. 現在の幼児は怖がりやで,挑戦しようとしにくい
 14. 現在の幼児は協力・協働して遊ぶことが多い
 15. 現在の幼児は粘り強く,最後までやりとげようとする
-